

ヒマラヤ登頂報告



エヴェレスト(左)とローツェ(右)

8000m峰を対象とした今年度の海外登山基金助成対象2隊の意欲的な登攀が行われました。東京農業大学は環境に配慮しながらエヴェレストとローツェの連続登頂を、明治大学はアンナプルナI峰の難ルート南壁から登頂し、単独クラブ出身

者による8000m全14座登頂を目指すという意欲的な活動を完結させました。今年のヒマラヤは天候が極端に悪く、両隊とも大変苦勞したようですが無事目的を達成しました。12月には東海支部を中心とする冬期ローツェ南壁登山隊が初登攀を目指します。

今月号は、単独大学やクラブの大きな登山活動をお伝えしましたが、来月号では山岳会初めてのシニア登山隊や最近の公募隊、個人の楽しみの海外登山などをお伝えしようと思っております。
(会報委員会)



2003年(平成15年)
8月号(No. 699)

社団法人 **日本山岳会**
The Japanese Alpine Club

定価1部 150円

URL ● <http://www.jac.or.jp>

e-mail ● jac-info@jac.or.jp

目次

ヒマラヤ登頂報告	1
報告	4
第46回有志閑談会/科学「中央構造線と塩の道を探る」/医療・第23回登山医学シンポジウム/自然保護・講演「高山植物はなぜ大切なのか」/丹水	
支部だより	
青森/秋田	7
海外の山	8
東西南北	9
札幌で松方三郎を囲む会/フランス山岳会訪問記/ウェストンの帰英と日本山岳会/鞍掛山と四谷の千枚田/アルピニスト・山崎直方とビッケル/ガイドブックの図書紹介は慎重に/アルプス山岳スキー	
Climbing & Medicine	24・15
さんけん通信	15
英文誌『ジャパニーズ・アルパイン・ニュース』の発行	16
図書紹介	18
『北の山の夜明け』『熊野山こよみ』『立教大学部報第11号』	
図書受入報告・新入会員	20
会務報告	21
INFORMATION	22
ルーム日誌	23

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木 10~20時
水・金 13~20時
第2、第4土曜日 閉室
第1、第3、第5土曜日 10~18時

東京農業大学エヴェレスト・ローツェ 環境登山隊2003報告

長久保 浩司

3月16日、我々環境登山隊一行は、カトマンズから空路ルクラへ出発した。メンバーは、登山隊9人、環境調査隊の学生8人と部長先生1人の計18人。農大にとつては1995年のトゥインズ登山以来の登山隊である。今回は今までと違い、キャラバンルートおよびBC周辺の水質、ゴミやトイレなどの調査や、ハイキャンプのゴミや糞便の回収等、環境に配慮した登山を行うというものである。隊荷はシェルパにまかせて、先

もに学生がいるので、毎日の行動には気を遣った。ゆっくりとしたペース、そして休養をしっかりとつたため、幸い大きく体調を崩す者もなく、全員無事にBCに入ることができた。BCはすでに何隊か入っていたが、それほどの混雑は感じられなかった。しかし、日に日にパーティーが増えていき、またたく間に街になった。正面には悪名高き「アイスフォール」が見える。ルートは、SPCC (Sagarmatha Pollution Control Committee) やインド・ネパールアーミー隊が中心となり、各隊シェルパ合同による工作で、



ローツェから見たエヴェレスト

ロープが伸びていった。最終的にBCには30隊ほどのチームが集まり、我々はそのうちの1隊にすぎず、我々が意見を挟む余地はなく、ルートが伸びるのをただただ待つだけであった。楽といえは楽なのだが、登山の本質とは少しずれていくように思う。しかし、これだけ多くの隊がそれぞれ勝手に登れば、それはそれで却って危険である。きっちりルールを決めなければ、800人も人間が一緒に登ることはできないだろう。逆に自分たちの登山を展開したい人たちは、エヴェレストのノーマルルートには来てはいけない。

我々は基本的に全員同一行動とした。登山活動は順調に進み、4

月29日ローツェ・アタック態勢が整った。当初はエヴェレスト、ローツェを同時にアタックして、その後メンパーを入れ替え再度エヴェレスト、ローツェ・アタックという予定であったが、若いメンパーに順応が完全ではない者が何人かいて、とても同時両峰アタックができる状況ではなかった。そこで計画を変更し、まず、ローツェに比較的調子の良い谷川、長久保、広瀬、吉田、中村の5人がアタック。その後いったんBCに下りて休養後全員でエヴェレストへアタックという計画に変更した。アタック前には両峰ともいったんペリチェ(約4200m)まで下りて休養をとった。

ローツェへはC4から雪壁を登り、クローワールに入る。クローワールは雪は少なくガレが露出しているところがあり少々登りにくい。技術的には問題なく5月10日5人全員がローツェ頂上に達することができた。ローツェから見るエヴェレストは圧倒的な高さで立ちはだかつていた。本番はまだ先である。

5月21日、サウスコルのエヴェレストC4へ入った。数日前まで

非常に風が強かったため、C4で待機していたパーティーが諦めて続々と下山していた。サウスコルには雪はなく、また以前聞いていたほどのゴミは全くと言っていいほどなかった。調子の良い者は12時前後に到着したが、調子が今ひとつの者は3〜4時くらいまでかかってしまった。この到着時間の差がそのままアタックに響いてしまった。

着いてすぐに寝る態勢に入り、その日午後7時には起床し、午後9時半にアタックへ出発した。天気はまあまあである。この時点でネパール側からの登頂者はなく、そのためルートはまだ頂上まで伸びていなかった。各パーティーのシェルパ合同パーティーが先行しルートを伸ばしていった。ヘッドランプの行列はまるで富士山登山のようであった。やがて明るくなり、遠くマカールが望めた。酸素は、ローツェ登頂者は2本、それ以外の者は3本(そのうちシェルパに1本を背負ってもらう)を毎分2リットル吸った。明るくなるにつれて風が強くなり、南峰を越える頃には、フィックスロープが大きく弧を描くほどにまで強くなつて

いた。しかし、寒さはさほど感じず、ダウンミトンを途中で普通のオーバーミトンに交換した。

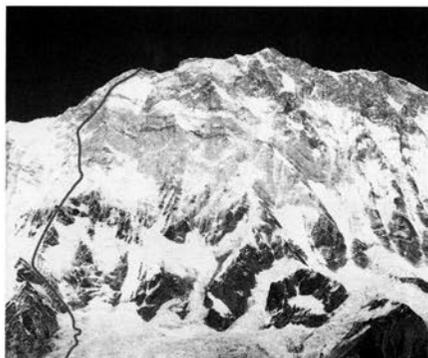
6時50分にまず谷川が登頂、続いて私が頂上に着いた。まだかろうじて周りの景色が見えていた。続いて吉田、学生の山村が着いたが、この頃景色は完全にガスで見えなくなっていた。学生の山村が登ったことは我々にとつて大きな喜びであった。1時間ほど頂上にいて、下山を始めた。その直後にすれ違いで廣瀬が登頂。この頃風が最も強くなり、その後の残り4人のアタックは中止した。

それでも後から登って来るパーティーは後を絶たない。無事を祈りつつ先を急いだ。酸素を吸っているとはいえ、ペースは上がらない。フラフラになりながらやつとおもいでC4に到着。頂上を後にしてから6時間以上かかっていた。その日はテントに入ると食事にも摂らずに寝てしまった。

こうして、我々のエヴェレストは終わった。しかし、決して大成功とは言えず、多くの課題、反省点を残した。登れた者、登れなかった者それぞれが、考え、反省し、次の登山に繋ぎたいと思います。

明治大学アンナプルナーI峰南壁2003 登頂報告

高橋 和弘



アンナプルナーI峰南壁英国ルート

明治大学山岳部および炉辺会（OB会）の8000級峰への挑戦は、大塚博美会員による、日本山岳会マナスル登山隊への参加に始まる。1970年、植村直己がエヴェレスト登頂し、炉辺会にとって初めての8000級峰登頂者となる。以来、着々と実績を重ね、97年にはマナスルに8名の大量登頂者を出し、炉辺会員による8000級峰登頂は10座に達した。2001年に明治大学創立120周年、翌02年には山岳部創部80周年を迎えるにあたり「ドリームプロジェクト」と銘打ち、14座完登を

目指して、残る4座に登山隊を派遣した。一昨年のガツシャーブルムI・II峰、昨年のローツェと3座すべて全員登頂に成功。残り1座。

アンナプルナーI峰は、14座の中で最も成功率が低く、日本人にとっては登頂者よりも死者の方が多いという歴史が、その危険さを物語っている。我々は、技術的に困難でも、致命的な大雪崩に見舞われる危険の少ないと思われる南壁をルートに選び、ローツェ登山後に偵察を行った。本隊には全員8000級峰のサミッターを揃え、その延べ登頂数は9座、26回に登る強力な隊が編成された。

3月29日、4200級のモレーンにBCを建設。登攀活動は、連日午後の降雪に見舞われ、スノーシャワーを浴びながらのルート工事を強いられた。それでも偵察の効果もあり、順調にルートを延ばし、4月26日に核心部の「フラットアイロン」基部、7150級地点に到達した。しかし、その後大

きく天候が崩れ、全隊員がBCに一時撤退、BCでもひと晩に60センチの積雪に見舞われる。英国隊の記録にあるように、朝は晴れても昼になると雲が湧いてきて、午後には雪が降るパターンが毎日続いた。結局終日雪が降らなかつたのはアタック日だけだった。

天気回復した5月6日から、核心部からのルート工作。C2は3級も埋没していた。丸2日かかりでC2を再建し、12日、フラットアイロンの岩壁を突破。最終キャンプとなるC4は、雪のリッジを切り崩しても、1昼ほどのスペースしかなく、ピバークのような状態で、皆膝を抱えたまま、一睡もせず16日のアタック日を迎えた。午前3時に出発。7時過ぎに7700級のミニロックバンド上の雪田に出たが、そこからのナイフリッジと雪壁が非常に長く、苦勞させられた。幸いこの日だけは好天が続き、午後2時40分に頂上に達した。

シェルパ2人を含む8名の大量登頂かつ無事故という、最高の結果を残すことができた。ルート工作はすべて日本人隊員が行い、荷上げも日本人主導、最終キャンプ

への荷上げは日本人のみ、当然ラッセルも自分たちで行うという、本来の登山ができた。しかも、アンナプルナーI峰全体で我々のほかに登山隊はなく、余計なことに気を遣うことなく、山に集中することができた。自分たちの力で登つたと、胸を張れる登山であった。

最後の最後に好天にあたり、幸運に恵まれたが、この幸運は我々が実力で手に入れたものである。抜群の体力と、決して折れない精神力を全隊員が持ち、どんな苦境にも決してあきらめずに頂上を目指したからこそ、神も味方したのだろう。そんな我が部の根底には、学生時代の苦しい合宿がある。明大山岳部はとかく時代遅れを言われるが、地道な活動が生む成果を今回の登山が証明したと言える。80年に及ぶ部の歴史の中で、こうして脈々と明治の伝統を受け継ぎ、タスキがこままでつながったことは大きな成果である。また、14座への挑戦の中で、死者がひとりも出なかつたことも、大いに誇れるであろう。この成果を元に、今後はさらに自由な発想で、各自目標を定めて、自分の登山を発展させていければ、と思っている。

報告

REPORT
8月

第46回有志閑談会

今年も「うかい鳥山」で

第46回有志閑談会は今年も高尾の「うかい鳥山」で去る6月21日盛大に行われた。出席者は30名、遠方からの会員は北九州の吉村健児、兵庫・西宮の宗實慶子、長野からの原謙一の各会員。世話人はすでに4年間務めた中川武、三上智津子の両会員であった。

この閑談会は開会前からなごやかだった。まず、幹事の心遣いによつて配布された事前の資料、欠席者の近況そして「有志閑談会事始め」を出席者一同読みふけた。「事始め」には第1、3、6回の有志閑談会の記念写真と第7回の寄せ書きが載せられていたが、その写真のなかには100年の歴史に輝く日本山岳会を支えてきた先

日本山岳会の各委員会
同好会の活動報告です。

人たちの顔がきら星のごとく並んでいた。田部重治、藤島敏男、松方三郎、日高信六郎、武田久吉、冠松次郎、別宮貞俊、深田久弥……。一同、有志閑談会の果たしてきた伝統の重みに今さらながら深い感銘を覚えた。

有志閑談会はほぼ定刻、13時5分より中川幹事の名司会で開会した。乾杯の音頭は出席者中、会員番号のもっとも若い坂倉登喜子さんがとつた。

まず、指名により新出席の平山新会長の挨拶兼閑談から始められた。長くかかわっていた南極観測について、当時の話から現在の状況を手短かに話された。

出された料理はまず、ここの名物加茂なす、続いてメインは炭火による焼きとり、締めは汁ものトコロめし。



第46回目を迎えた伝統の閑談会

その合間に皆勤賞の高田真哉会員、シベリアの氷の話を神原達会員、芳賀副会長のスキーの話、記録性を重んじるカメラの羽田栄治会員と続き、それぞれの座席で思いの歓談となった。ビールも酒も飲み放題。酒はおもむきのある青竹の筒に入れられている。みなさしつさされつ旧懐の思い出にふけた。

会も終わりに近づき棹尾を飾つたのは「百年史」の編集にかかわる元副会長の松田雄一氏の熱弁。榎本武揚の話まで飛び出し延々と続けられ、そのあと次回幹事小倉織田沢両会員の紹介で幕を閉じた。恒例の記念撮影は羽田会員によ

って行われ、明年の再会を約し、送迎バスの人となった。

(小倉 厚)

科学委員会

探索山行「中央構造線と塩の道を探る」

塩の道は東経138度線上に中央構造線とフォッサマグナの西縁に沿って、糸魚川より静岡掛川まで、一直線に縦断する。科学委員会では、昨年は日本海側・千国街道を中心に探索山行を実施し、本年は6月7、8日の日程で、太平洋側を掛川から信州に向かって、さかのぼることとなった。

早朝、渋谷を出たマイクロバス2台は、東名掛川ICにて、今回の講師でもある「掛川塩の道踏査研究会」稲垣敏彦会長以下10名の会員諸氏と落ち合い、塩の道に沿いながら、火祭りで名高い秋葉神社に向かった。

ここでは古来の塩の道と、信仰の道である秋葉古道とが結びついており、整備された表参道には、昭和18年の山火事によつて多くの木が燃えたにも拘わらず、樹齢400年にもおよぶ杉が数多く残っ

ており、本殿からは、遠州平野、その中を貫く天竜川も一望できる。奥の院の裏からは、半分朽ちかけた笹の茂った、塩の道でもある裏参道を下山。バスで南信濃村の宿泊先「やまめ荘」へ移動後、講師の稲垣氏を囲み、質疑応答と和やかな懇談会を楽しんだ。

翌朝は、夜来の雨も上がり晴天に恵まれた中、兵越峠を越え、一般には比較的なじみが薄い、南信・遠州の境に位置する、一等三角点の山「熊伏山」(1653m)登山口の青崩峠へ。登山道の脇は中央構造線の活動のために大きく崩壊し、その名の通り、遠目には青く見える地質であった。

山頂からは南アルプス南部の聖岳・兎岳等の眺望を楽しみ、全員元気に下山した。

さて今回の太平洋側の塩の道は、山としての深みは北の千国街道に一步も二歩もゆずるとしても、山あいの集落、民家の軒先を通り、段々畑を横切り、荷車を使用して、塩以外の生活物資も効率的に運び、日常生活に密着した、人間くさい道である。

使役の「力」も、北は人力と牛であったが、ここでは人力と主に

馬力であり、途中には馬の頭をそのままかたどった馬頭観音も残っており、秋葉山信仰とも相まって発展したこと等々、非常に興味深いものであった。

最後に、事前の踏査、ルームにおける勉強会と、種々お力添えいただいた、掛川塩の道踏査研究会の皆様に、心から感謝申し上げる次第です。(井上 希夫)

医療委員会

第23回日本登山医学

シンポジウム開催される

5月31日、6月1日、大野秀樹会長(杏林大学教授)の主催により、第23回日本登山医学シンポジウムが芝弥生会館(東京)で開かれた。会場は浜松町駅から徒歩7分と好立地であった。展望は浜離宮庭園を借景にし、小雨に煙る豊かな緑が、ロビーで休憩する参加者の目を楽しませた。参加者数は140名と例年よりも多く、盛況であった。主な内容は、以下のとおりである。

特別講演は佐藤祐造氏(名古屋大学教授)が「山と生活習慣病」について、該博な知識と広範な資

料に基づいて、わかりやすく講演された。「自分が講演する時に役立つ」と、熱心にメモをとる聴衆もいた。

招聘講演は、ラダック・ツゾルト氏が「低酸素と酸化ストレスについて」、流暢な日本語に英語を交えて講演し、内容ともども聴衆を魅了した。船木上総氏(苦小牧東病院)はモンブランでクレバスに落下した経験「登山と低体温―モンブランからの生還―」について、人生観をまじえて話し、感銘を与えた。

教育講演は渡辺卓也氏(杏林大学教授)が「登山医学と臨床検査」について行い、あらためて高所が生体に及ぼす広汎な影響を勉強する事ができた。

シンポジウムは「登山と栄養」について行われた(パネリスト・阿部岳、山本篤、山本正嘉、内藤広郎、大野秀樹、百々瀬いづみ)。アミノ酸飲料(V.A.A.M.)の生みの親である阿部岳氏(理化学研究所)が基調講演をした。筆者は昼食後の講演としては珍しく居眠りをしなかった。講演内容も刺激的であったが、講演前に飲用したアミノ酸飲料には脳を賦活させる作

用があるということであり、その効果とも思われた。

そのほかの講演も、それぞれの体験に基づいた説得力のある内容であり、興味深かった。功労賞は永年の呼吸生理学についての登山医学研究に対して本田良行氏(千葉大名大学教授)に、奨励賞は「海外旅行中に飲用する(水)の安全性について」の研究に対し夏井正明氏(自由学園)に授与された。

一般演題は21題(高所順応、遭難の調査、ダイアモックス、高山病の病態分析など)と、例年よりも多く、活発な討議が行われた。

山の本の古書店

在庫目録年2回(5月・11月)発行
ご希望の方お申込ください。

ご蔵書を整理するときはぜひ弊店に!

晴山書房

古書買入

東京都中野区上鷲宮4-6-3

TEL&FAX 03(3990)4540

最後に大野会長が「日本登山医学研究の昨日・今日・明日」と題して講演し、ダイアモックス委員会の設置、抗酸化サプリメント服用のガイドライン作成などの必要性を提唱した。

次回は橋本しおり氏(東京女子医大)によって開かれる予定である。発表された内容は医療関係者に限らず興味深く、実際に役立つものが多かった。一般登山者も本会に出席されたり、登山医学会の会員になることをお勧めする次第である。講演内容について、順次本誌医療コラム欄「Climbing & Medicine」で紹介したい。

(野口 いづみ)

自然保護委員会

講演会「高山植物はなぜ大切なのか」

小泉武栄氏(東京学芸大学教授)の講演会「高山植物はなぜ大切なのか。世界的な視野から見た日本の高山」を聴くことができた。小泉氏の「山の自然学」は、同名の講座や出版物、あるいは研究会の存在によって、つとに明らかではあるが、真つ正面からその内容に

触れることが少ない。

高山植物が大切なことは、今や常識であるが、私も覚えがある。

昭和20年代の後半八幡平の毛せん峠で、花摘みをして同行の女生徒にあげたことがある。同じ八幡平で、数年前、高山植物の前に座り込んで、人がいなくなるのをじっと待っている女性が2人いたのを見た。このような人に、なぜ採ってはいけないのか、説得できる人が、われわれの中にどの程度いるのだろうか。高山植物を護ることが、今やどんなに大切なことなのか。小泉氏の話は、その強い意志が柔らかな人柄に包まれて我々聴衆に働きかけていた。

世界で600種に及ぶ高山植物。その中の約3分の1は日本にある。しかも固有種が多く、この日本の高山は、標高が低いにもかかわらず、世界的に見ても豊かで厳しい自然なのだ。

ヨツバシオガマにふたつのタイプがあつて、そのひとつは以前の氷期の時に南下しており、間氷期にはおそらく、飯豊山の辺りでヤツトコサ生き続けた。最終氷期が訪れた時に、新しい種のヨツバシオガマが南下し、この2つの種は、

今年もさくらんぼで会いましょう

日本の中部以北の山域で、生き続けている、などの話は、壮大な山と高山植物が地球規模のドラマをどの様に演じているのか、語ってくれている。

いま目になっているこの花に秘められた大切なものの証し。今回の話はそのようなことをわれわれに、素晴らしい花と景観の写真や、その場所を訪れた時の想い出とともに植え付けてくれた。すでにオパーユースの衝撃波に晒されている日本の高山と、高山の自然をどのように護ればいいのか。日本の高山の自然を解析し、どのように大切にしなければならぬのかを示してくれた講演会であつた。

(大船 武彦)

丹水会

第44回例会

梅雨の最中の6月14日夕刻、小雨降る丹沢の奇の民宿「仙口」に44名の会員が集まった。今回は会発足22年にして第44回の例会であり、偶然の数字にもその足跡を感

じてしまう。周囲の山を歩いてきた人もおり、入浴で汗を流してもらうと、恒例の講義が始まった。講師の横浜山岳協会顧問・植木知司氏から丹沢の山名にまつわる話を伺う。

よく歩いている山についても初めて知ることばかりだ。知力と身体を使う登山の奥深さと楽しみを再発見する。続く夕食では昨春秋以来会う会員同士も多く、積もる話に差入れの地酒がまわり、夜半まで賑やかだった。

翌朝は小雨模様になったが、山里の空気に目覚めのコーヒーがうまい。朝食を済ませると昨日の山歩き組は帰宅するも、10名の有志はシダンゴ山へ向かう。他のパーティーが全くない路をたどる。

よく踏まれた路にも人の生活や歴史を感じてしまう。貸切りの山頂ではテーブルを囲んで再びガヤガヤ。帰路は宮地山頂を踏み、再び奇に戻った。相変わらずの梅雨空。満ちた心をおみやげに、しつとりと静かな山里を後にした。

(大槻 利行)

JAC 支部だより



全国各地の支部から、独自の活動状況を
レポートします。

青森支部

第8回・白神山地 ブナ林再生事業

青森支部がJAC創立100周年記念事業として実施している「第8回・白神山地ブナ林再生事業」が、6月20～22日に行われた。初日は台風6号から変わった温帯低気圧の通過で悪天候でしたが、天気が回復した21日には世界遺産地域に隣接するスギ植林地で、成長不良スギの除伐作業と、新たな作業道づくりを行いました。参加者は、地元農業高校の生徒26名、高尾の森作りスタッフを含むJAC会員18名、協力者29名の計73名でした。農業高校の農場で

種子から育てられたブナ苗が、白神に里帰りして植えられたのも大きな成果でした。

22日は、世界遺産のコア地域まで天然ブナ林の観察に出かけ、白神山地の典型的なブナ林も堪能してもらいました。(村田 孝嗣)

秋田支部

仏鬼一体・五峰巡り

(東光山・笹森山・仏洞山・日住山・鬼倉山)

東光山。12年ぶりに再登することになった。後日、当時の会報『秋田山岳』(平成3年、第19号)を引っぱり出して見てみると、今は幽明境を異にしてしまった宮田菊雄さん、今野實さん、中島富雄さんが、山頂の薬師堂の前で撮った写真にいます。娑婆組の面々もひと昔以上前のことだから皆若々しいし、小生も髪の毛が自分でも羨ましいほどふさふさとしている。嗚呼、光陰矢のごとしだ。

5月11日、母の日。秋田支部有志山行ということで、9名が7時10分、登山開始。懐しい毘沙門堂に詣でてから東光山山頂(5944m)に着いたのは8時半。この御

山は古来より薬師信仰で栄えたところと聞く。山頂に薬師如来らしき石仏が我々を出迎えてくれた。

点けた灯明をすぐ消してさらに笹森山(594・5m)へ急ぐ。展望のない山頂に着く。

再び東光山へ戻り、タケノコを採りながら下る。仏洞山分岐から廃道をたどりながら、今回の目的のひとつである仏洞山の正体確認に入る。20分ほど行くと、どうやらそれらしき秘所めいた白黄色の岩峰に出くわした。詮議しながら各自納得し、山道へ戻った。車で日住山登山口へ向かう。

正午を少し過ぎた頃、登山口に陣取って昼食タイムとなる。腹こしらえができたところで登山開始。13時15分、日住山山頂(6064m)に着いた。以前にも詣でたことのある小祠があり、中央に剣、向かって右に大日如来、左に薬師如来が祀ってあった。

残るはあと一峰、鬼倉山(約600m)が我々を待っている。車で林道を移動し、登山開始。この日2度目の藪こぎに気力をふりしぼる。ひとりじゃとても登る気になれないが、皆のパワーに引っぱられて進む。間もなく、先頭を切

っていた佐々木支部長が、地図にも載っている岩峰の一角に小さな洞窟を見つけて、その中に石像が祀ってあると大声で後続のメンバーに告げてきた。好奇心に導かれて入ってみると、右肩にマサカリ、左手に杖を持った石像が安置されていた。とっさに私は大平山の三

吉大神に共通するものを感じた。三吉さんは、さんきち即ち「山鬼」さんでもある。元来「鬼」は悪鬼ばかりではなく、人を護り助ける役をする鬼もあった。たとえ

ば、役行者につき従った前鬼や後鬼は造形のうえで鬼身にあらわされているが、本来は奈良県大峰山系の山人(山岳生活者)であったと言われている。鬼は敵にまわすと恐れ存在だが、いったん味方になればとても力強く頼もしいボディガードでもあるわけである。修験道で「仏魔一体」の境地を重んずるのは、こうした点からも合点がいくのである。

14時40分、展望のない山頂に立つ。わけてもらったグレープフルーツがうまかった。18時25分、新屋支所前にて解散。午前は仏の洞を訪ね、午後には鬼の倉に遊ぶ有意義な一日であった。(土肥 貞之)

海外の山

オリンピックと
中国の市民登山

江本 嘉伸



パルコル。こんな風景は昔のこと……。 (1980年2月 江本撮影)

のみだった。新たな南西航空便は毎週月、水、土の3日、雲南省の徳欽(デーチン)を経由して広州―ラサクを往復飛行する。

夏の観光シーズンを前に、ラサクのチヨカン寺のまわりを周回する路、パルコルと呼ばれる名物通りが改装された。道は再舗装され、排水溝が整備され、公衆トイレが新たに建てられた。

青海省のゴルムドとラサクを結ぶ鉄道はいよいよ建設の大詰めに入っている。2008年のオリンピックまでの完成を目指す。「チベットへ列車の旅」が、現実になりつつある。登頂50年を迎えたエヴェレスト。今年北側で筆者が目じた登山隊は、実は中国隊であった。

隊の名は「SOHU(搜狐)登山隊」という。興味あるのは、一種の公募登山隊であることだ。総隊長の王勇峰は7大陸最高峰に立った登山家だが、9人の隊員は、深圳の不動産会社社長の玉石(52)、同じく深圳の大学教授、李偉文・梁群夫妻(ともに35)、成都の新聞記者、劉建(41)、海南島のITエンジニア、陳駿池(37)、大連のアウトドアクラブ責任者、劉福勇(43)、インターネット検索システムとしては中国を代表

する北京の「SOHU.com」のCEO、張朝陽(39)と、出身、職業もさまじい。ひとり10万元(約150万円)の自己負担は、隊員個人への支援もあり、調達できたという。

隊の動静は、連日インターネットで伝えられ、その動画など斬新な手法を取り入れた画面の人氣もあり、一気に注目度は高まった。しかし、大きかったのは中央電視台(CCTV)の生中継である。

女性プロデューサーがジョン・クラカワの「Into Thin Air」(邦題「空へ」)を読んで感動、自分たちの手で中継することを企画した。資金の問題で挫折しかかったが、王総隊長がキリマンジャロ、マッキンリーを含む高峰登山に打ち込んでいる玉石に相談し、知り合いの「SOHU.com」が登山隊資金170万元のうち120万元を支援することになったという。若いCEO、張が隊員として加わり、HPも意欲的なものとなったわけである。

一方で、生中継のための1000万元(1億5000万円)の資金は、大手飲料会社オトリリーなど5社が参加することで解決した(その結果テレビではネット上とは違い「オトリリー登山隊」一色となった)。C

CTVは、83人ものスタッフをチヨモランマに送り、ベースキャンプには特別中継車を、ABCには小型衛星回線設備を、ノースコル以上の高所にはチベット登山学校の登山家たちをカメラとともに登らせ、女性人氣キャスターによる毎日2時間の現地中継を支えた。

5月21日、まず大学教授カップルの妻、梁群、玉石ら5人の隊員と6人の協力員が登頂し、6時間の生中継を盛り上げた。

頂上でチベット登山学校のスタッフが掲げた旗はオトリリーと服装を提供したメーカーの旗だった。20秒後、あわてて中国国旗を掲げたが、後々まで非難的となった、というのがどこかユーモラスだ。

胡錦濤国家主席は21日、同登山隊の登頂成功の報に祝電を送った。2008年の北京オリンピックでは、チヨモランマ山頂を経由する前代未聞の聖火リレーを敢行することも、発表された。

「2008年」の成功に向けて、チヨモランマが大きな役割を期待されていることを感じさせる一連の動き。その中から、中国のチベット観光化政策と、国から自立した新しいスポーツ登山の芽生えが見える。

東西南北

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。(紙面に限りがありますので、一点につき一〇〇〇字程度をお願いします)



イラスト・宇都木慎一

札幌で松方三郎氏を囲む会 その時の署名色紙

高澤 光雄

若溪堂から発行された坂本直行
山岳画文集『雪原の足あと』出版



中央に「昭和40年5月15日 松方三郎 三条多一に於て」とある

記念講演会を、昭和40年5月16日

に北海道新聞社ホールで開催。その講師に当時の会長、松方三郎氏がかけてくださった。

前夜、坂本知祥氏の肝煎りで松方三郎会長を囲む会を札幌市狸小路の三条多一で開催。その時の色紙である。坂本直行氏の「あづまいちげ」のスケッチと出席者の名がある。この席に加納一郎、伊藤秀五郎の両氏が出席されたのは嬉しかった。

会報241号(昭和40年7月)にこの模様を記しておいたが、北大山の会会長の渡辺千

尚氏に推薦文を書いてもらい、この本の宣伝や販売に走り回っていた。38年前のことである。

現在、札幌の秀岳荘白石店3階に北海道支部ルームがあり、書棚には諸先輩の著書、本部から寄託された西欧の古典的名著が並んでいる。それらを日本山岳会100周年の際に、地階にあるミーティングルームで展示し、一般公開する予定である。

加納一郎氏は北海道最初の名誉会員で、北大在学中の大正10年に『山とスキー』を創刊。北海道庁に勤務して行政主導の北海道山岳会を創設。登山道や山小屋を新設して登山の普及に貢献、後に極地研究者として活躍された。

2005年は伊藤秀五郎氏の生誕100年、その翌日は坂本直行氏が生誕100年を迎える。100周年の記念展には加納、伊藤、坂本3氏の図書や資料も展示し、意義ある回顧展にしてみたい。

フランス山岳会訪問記

藤本 慶光

この夏フランスに旅をした時に

パリでフランス山岳会の本部を訪ねる機会を得た。パリに住む知人に連絡をとってもらい、理事会に出席するためにパリに来ていた会長のムドレー氏に会い、環境、国際関係担当のフルーリ氏の通訳でいろいろフランス山岳会について聞くことができた。

山岳会が所有する3階建てのビルにある本部の位置は、東京でいえば日暮里か田端にあたるようなパリの19区にあり、本部職員23名の大所帯だ。創設は日本山岳会より30年早い1874年で来年で130年の歴史をもつ。



ATLAS TREK

個人手配旅行から人気のトレックツアーやエクスペディションのアレンジまで。充実度が違う「旅」のプランニングをこころがけています。山旅などあらゆるジャンルを取り扱っています。お気軽にご連絡ください。

株式会社 アトラストレック
(国土交通大臣登録旅行業1167号)

東京 / 〒160-0008 東京都新宿区三栄町23 TEL 03-3341-0030
 大阪 / 〒540-0012 大阪市中央区谷町3-4-5 中央谷町ビル501号 TEL 06-6946-9111
 名古屋 / 〒464-0807 名古屋区千種区東山通り5-113 オークラビル6F TEL 052-788-2422

フランスとモロッコに約2000の支部があり、約9万人の会員数という。支部のリストを見るとパリ地区はイル・ド・フランス支部になっているが、近郊のヴェルサイユやサンジェルマン・アン・レイなどにも支部があり、かなり小さい単位で支部がおかれているようだ。会長の任期は4年で、オリピックイヤーに改選され、再選は妨げられないので、8年間会長を務めることになるらしい。「私の任期は2005年の1月なので日本山岳会の創設100周年をお祝いできないね」と会長が笑って語った。

面白いと思ったのは会員の支払う年会費で、年齢などの違いで7段階に区別されているうえに支部毎に金額が違わらしい。会費は3つの部分に分かれていて第1が遭難保険、第2が本部費用、残りが支部の運営費用に当てられているとのこと。パリに住む山岳会員の友人は年間69ユーロ払っているといっていたから日本円で約1万円弱の支払いだ。

フランス山岳会が所有して経営する山小屋は全土で142あり、130ページもある立派なリスト

にはそれぞれの山小屋に関する詳細な情報が地図とともに書かれていて、末尾には支部の一覧表もついていた。会員だと利用料が安くなるらしいが、どのくらい安くするのかは聞きもらなかった。

会員向けにいろんな出版物を出している。フランス語が読めないので十分理解できないまでも、なかなか充実した内容であるらしいことは推測できた。年2回会員に届ける会報は写真を豊富に使ったオールカラー印刷の大判の立派なものだし、「山のマニユアル」と銘打った1000ページほどの教科書も販売している。

大変厚意的に受け入れてくれていろいろ話してくれたのはありがたかった。次の機会に会員サービスなどについて記してみたい。

ウェストンの帰英と 日本山岳会

田畑 真一

明治38年3月ウェストンは離日し、英国への帰国の途についた。理由については、彼の健康上の問題などがあげられている。

私は日本山岳会の創立に向け、具体的な助力をするための理由もあつたと考へたい。日本山岳会の創立を早める意義もあつた、こう断定してもよいと思う。

なぜなら、彼は離日に先立ち、小島烏水をはじめ、岡野金次郎、武田久吉、高野鷹蔵をよび、創立を促す声かけをした。

烏水は「その帰航の数日前に、私は岡野、武田、高野の三君とともに、ウェストンを横浜のオリエンタル・パレス・ホテルに訪れた。ウェストンはくり返して、日本に山岳会建設を、諸氏の力に待つというような意味のことを言われたが「烏水著『アルピニストの手記』と書いている。

島田巽らによれば同年5月、ロンドンの港に着船したウェストンだったが、彼の動きは早かった。翌月7日には、アルパインクラブ会長・プリストルらが同クラブの会則と会員名簿を彼あてに送っている。これは前日・6日の同クラブ例会で、日本に山岳会の創立を望んでいる若者がいることを会長らに知らせた結果だった。しかも例会では、全会一致により、助力が決定した。

これを受け、同年6月23日、彼は烏水に対し、書状を発送（会長からの書状と同クラブの会員名簿、会則の写しを同封）した。

烏水は「日本山岳会の成立までに、同志の人々と、何十回となく会合した。おそらく何百通という手紙の、やり取りを（みんなの分を合算すれば）やつたろう。私の所蔵の手紙だけでも、数括の多きに達した」と書いている。

実際、烏水らの動きも早かった。そこで同年10月14日、日本で初めての山岳会が創立した。

ふり返ってみよう。彼の声かけが同年3月、烏水らによる創立が同年10月だ。明治時代にあり、驚くべきスピーディーな進行であり、画期的な創立だった。

外にあつては、彼の手ぎわのよい助力、内にあつては烏水らの熱情的な努力もあつた。力強くかみ合い、日本山岳会を生み出した。私はそう考へる。

鞍掛山と四谷の千枚田

橋村 一豊

山地帯の三河・沖積平野の尾張



鞍掛山にいだかれた千枚田

と、愛知県の地勢は東高西低である。三河の鳳来町四谷は鞍掛山(882・6m)の南西山麓にある集落で、多段の石垣で築かれた千枚田と呼ばれる棚田がある(2・5万畝、海老)。下から見ると鞍掛山の鋭角的スカイラインの下に、対照的に軟らかな曲線の多い自然石の石垣が何段にも積み重なり、自然と人工が融和した美しい山村風景を形成している。

1904(明治37)年、夏の長雨による鉄砲水の山津波が四谷の集落を掃蕩して大災害を生んだ。そこから立ち上がった村人たちが力を合わせて、山から流出した石を使って棚田を築き復興した。何年もかかって荒地を農地に変え、築かれた棚田は1296枚。千枚田の名は虚名でなく、この実態から生まれた。今でも39戸の農家が850枚を作付けしている。その総面積は14・6畝。また最近の環境世論の高まりを反映して、復田(休耕田を水田に戻す)の動きが目立つという。

四谷の一番上部に住む丸山俊明さんに聞くと、棚田の底には石を敷き詰め、その上に山の赤土を打って水漏れを止める。水田として2、3年使わずにおくと赤土に割れ目が入り水漏れするので、復田するには土壤をいったん田の外にかき出して、再度赤土を打ち直すという重労働が必要だという。

千枚田に合う米はミネアサヒという短稈小粒の品種で、各農家で種籾から育苗する。農協から市場流通に出すほどの生産量はない。5^キほど買って食べてみたが、東北のササニシキに似た食感で、よく噛むと甘味が出てとてもおいしかった。

鞍掛山千枚田保存会が四谷の人たちで組織され、方針を決めたり、情報やハードの受け皿として機能している。その役員をしている松

下誠さんに、次のような話を伺った。

棚田の中心線に沿って上から下へ通じる幅3mの舗装した農道をつけた。これで上下移動に軽トラが使える、作業は横への動きだけでよくなり、高齢化が進む耕作者の労働が大きく軽減された。県と町の助成金を使った。

地元連谷小学校(生徒17名)は、棚田3、4枚の田植えから収穫までを子どもにやらせている。

田に水を供給する沢は、集水域がスギ、ヒノキの人工林である。この水土保全と環境浄化機能を

向上させるため、間伐をすすめている。

生態系保存のため、棚田の下部にピオトープ(独・生物の小生活圏)として湿地を造成した。

2005年の愛知万博を機に、全国棚田サミットを四谷に招致し、棚田が環境保全に果たす役割を広く世界に訴えたい。また中国や東南アジア諸国など棚田を持つ国と連帯したい。

織田信長と雌雄を決すべく、甲州から遠来した武田信玄は三河の野田城を包囲、攻略していたところ、陣中病を得て撤退のやむなき

ユングフラウヨッホにいちばん近い村、ウェンゲンの家庭的なホテルアイガーと、スイスの旅の専門店アルプスウェイが自信をもってお勧めする共同企画。

アルプスウェイご利用で、ホテルアイガーにお泊まりの日本山岳会会員様へ4つの特典。

1. ユングフラウのよく見えるお部屋を優先的にご提供。
2. 民族料理フォンデュをご滞在中の夕食に1回ご用意。
3. アルプスウェイ駐在員による1日の専属ガイドサービス。
4. ホテルのオーナー、フックス氏より地元産リキュールをプレゼント。



あなたのスイス旅行を、このホテルアイガー滞在を組み入れてご利用します。

お問合わせ
お申込みは **アルプスウェイ** **ALPS WAY.** We Love Swiss
http://www.fellow-travel.co.jp/
〒150-0043 東京都渋谷区道玄坂2-16-8 ビジネスウィップ渋谷ビル4F
Tel.(03)5489-9541 Fax.(03)5489-6300
e-mail alpsway@fellow-travel.co.jp
〒530-0002 大阪府大阪市北区曽根崎新地2-3-13 若杉大阪駅前ビル6F
Tel.(06)6347-8984 Fax.(06)6347-8986
e-mail osaka@fellow-travel.co.jp

主催：株式会社 **フェロートラベル** ボンド保証会員
国土交通大臣登録旅行業664号 協賛：ウェンゲン観光局・ツェルマツェル観光局 後援：スイス政府観光局

に至った。重篤の信玄を護持する武田精銳武士団は、鞍掛山西麓のかしやげ峠を密かに越えて、甲府へ急いだ。しかし薬石効なく、信玄は伊那駒場にて客死した。行年52歳、1573年のことである。

さきほどの丸山さんの家から、かしやげ峠は登り30分のところにある。巨樹が立ち並ぶ下に古風と神威の気が漂い、夏でも涼しい。峠の手前にも向う側にも、千枚田の一部をなす田の跡が苔むす石垣の連なりとして残っている。今はスギの人工林に転用されてはいるが。死期迫る軍聖信玄の最後の山旅、かしやげ峠は人の心を歴史の郷愁へと誘う。

アルピニスト 山崎直方とピッケル(上)

長田 義則

地理学者の山崎直方(会員番号44番・略歴と写真は日本学士院提供)は明治31年12月、地理学研究



山崎直方 (1870-1929)

のためドイツに留学。ボンにてライオン教授に、ウィーンではベンク教授に師事し、明治35年2月の帰朝時には、東部アルプスで使ったピッケルや登山靴を持ち帰った。その夏、白馬岳に登り氷河の痕跡を発見、遠望した立山東方にもカール状地形を見て「氷河果して本邦に存在せざりしか」を東京地質学会にて講演し、氷河論争の口火を切った。

8月、岡野金次郎は烏水と槍ヶ岳に登ったあと「山の神の引き合わせ」のたとえのとおり再来日したウエストンとめぐりあい、アルパイン・ストック(ピッケル)を教えられた。ウエストンの助言から明治38年10月、山岳会は創立した。山崎は高頭仁兵衛の誘いに特別会員として入会し、主宰する東京地質学会誌に「山岳会の創立」の記事を載せ、山岳創刊号に「高根の雪」を寄せ巻頭を飾っている。

烏水は山崎のことを「陰に陽に会を援助され、学者でない素人の組織した山岳会に、これほどの注意を払ったり紹介の労を取ってくれた人はほかにはなかった」と胸中を明かしている(烏水全集12巻、地理学者の一群)。

明治41年5月、会員も500人を数え「山岳会第1回大会」を開催。展示コーナーに、山崎は留学先からの山道具9点を出品し、とりわけ衆目を集めたのが、アルパイン・ストックで、「氷河渡りの杖」と表記された(山岳3の2)。

参加者は91名を数えたが、展示されたピッケルの実物を知る会員は、ウエストン邸で見た岡野や烏水とシモンのピッケルを持っていた辻村太郎の数人に過ぎなかった。この大会で山崎は「欧州アルプス雑観」を講演して、参加者一同の関心を集めている。会場(東京地学協会会館)に三枝威之介(35番)、中村清太郎(153番)、加賀正太郎や辻村太郎(21番)らの少壮気鋭の学生も混じって見聞していた。中には、その後の人生や登山に影響を及ぼされた会員もいた。

一高生の辻村は12歳の時、山崎

の氷河遺跡の発見を新聞で読み、この大会で山崎の講演を初めて聞いた。颯爽たる姿は近寄りたいたい感じだったが、辻村には才気煥発であったこの新進学者が景仰的だった(辻村太郎著作集7巻)。

同年11月に地学協会は中央アジア最大の探検家S・ヘディンを紹介し講演会を開催した。この企画の一部始終に志賀重昂(37番)と山崎が骨を折り、山崎は通訳を兼ねわざわざ神戸まで歓迎に行き、その後も多くの機会に同行した。※神田の基督教青年会館では、文部大臣菊池大麓を迎えて、山崎が探検のあらましを述べ、ヘディンの英語の講演は比較的わかりやすかったと辻村は述べている。

山岳会での山崎の講演やヘディンの講演から強い感銘を受けた辻村は、後に山崎に師事して地学研究に生涯をゆだねることになった。翌42年1月には、会員同士がおおいにおもしろく話そうという趣意の有志晩餐会が開かれた。発起人を中心に16名の会員が集まり、この席でも山の道具や地図、写真を持ち寄る情報交換の場となった。この時三枝は登山用の鷹口2本と写真を持参する。

次回5月2日の有志晩餐会のあと、16日の第2回大会は会員90名と会員外79名を数える大盛会で、会員章の制定と山岳会の名を日本山岳会と改称する報告がされた。会員の頻繁な交流をきっかけに、7月の「白峰および赤石山脈縦走」となつて実行された。

三枝はこの縦走登山に鷲口に替えて初めてアルパイン・ストックを携帯した。中村はこれを「知人から借用のアルプスみやげのピッケル」と伝え、茨木猪之吉(262番)の挿絵にもピッケルの描写を見る。

赤石岳山頂の写真にピッケルは判読しにくいのが、中村と中央の大夫が持つ2本の鷲口は当時誰もが持たない道具としたら、三枝所有の鷲口なのか……と想像しながら、この山行に試作のテントを携行し、鷲口からピッケルへと移行した三枝の素早さに、進取の精神を強くくみ取った。

それにしても三枝がピッケルを借用した知人とは誰だったのだろうか。いままも模索中のことである。

(文中敬称省略)
※・東京地学協会・岡原義旦事務局長・書信

・日本地質学会・今井功名誉会員・書信

ガイドブックの 図書紹介は慎重に

石田 稔郎

ガイドブックや雑誌のガイド記事にはまちがいが多い。これは自分の経験だけを書き、関連の調査を怠っているからである。

『山』5月号で紹介された「海外トレッキング入門」のトップに(1)韓国の「雪岳山」のアクセス①金浦空港→東草とあるが、現在は東草ではなく、襄陽である。ここから登山口は南面の五色、北面の雪岳洞へとバスまたはタクシードで行く。本書では五色だけと読める。ただし、登山口へ行くには、ソウルからは定期バスもある。

雪岳山の頂上、大青峰からの下降は、2コースあり、まず「華彩稜線を北東へ向かい」となっているが、この稜線は20年以上も前から自然保護のため、入山禁止と解除がくり返され、現時点では入山禁止のようだ。それとこのコースは急峻なので、若い人以外はやめ

た方がよい。韓国の国立公園では「自然休養年制」と「山火事防止のための入山規制期間」がある。

雪岳山では、春期は3月1日から5月31日まで。冬期が11月5日から12月15日まで入山禁止となる。ハングルを話せるある岳人が、事前に照会して入山できると思つて、12月上旬に雪岳洞の入山統制所に行ったら、入山できず、泣く泣く帰ったという話もある。

韓国の国立公園は禁煙で、罰金が高いのも注意が必要。

次に20番の「ツエルマツト、シヤモニー」の項では、203ペーラの「トレッキングルート」の③ツエルマツト(登山電車)↓フェルスキンと書いてあるが、これはものすこし省略で、知らない人は迷子になるか遭難しかねない。

ツエルマツトからフェルスキンに行くには、ツエルマツトからブリク方面に行く電車に乗り、シュタルデンで下車し、ブリクから来るポストバスに乗り換え、ザースフェーの終点で下車する。歩いてフェルスキン行きのロープウェイの乗り場に行き、ゴンドラに乗つてフェルスキンに上がる。目についた誤りは以上で、ほか

の23コースは旅行社利用が多いので問題ないようである。そしてこの書はガイドブックというより、海外トレッキング報告集だということを、念頭において読むのがいいであろう。

夢を追いつづけて30年 アルプス山岳スキー

宮本 数男

1976年1月、まちづくりの建築仲間とともに、研修でヨーロッパ各地を訪れた。私の希望で1

山上の静かな村と絶景の山上ホテルに宿泊

秋のスイス・アルプス・ハイライト 8日間

マッターホルンを眺める絶景の山岳ホテルに宿泊。さらに、U字谷の崖の上に開けた好展望の村ミュレンに2連泊。静寂を取り戻した秋のスイス・ハイキングを満喫する旅。

●東京発着(スイス国際航空) **連泊**
●9/20●9/27●10/7●10/14発 288,000円～328,000円

国土交通大臣登録旅行業第490号/日本旅行業協会正会員 ●ボンド保証会社
アルパインツアーズ株式会社

〒105-0003 東京都港区西新橋1-12-1 西新橋1森ビル2F ☎03-3503-1911
大阪 ☎06-6444-3033 名古屋 ☎052-581-3211 福岡 ☎092-715-1557
e-mail:info@alpine-ts.co.jp http://www.alpine-tour.com

泊したシャモニーで、モンブラン(白山に通じる)に感動。エギュー・デュ・ミデイに行き、シャモニー針峰群の偉容にクライマーとして武者振るいをした思い出がある。

そしてモンブランからマッターホルンまでのスキー縦走は私の夢であった。しかし71年のマツキンリー登頂の際、福井県職員を退職し、まちづくりのコンサルタントとして創業間もない者としては夢を見るだけで30年が経過。2年前日本山岳会アルパインスキークラブの奥村氏からアルプス行きのお誘いを受け、出発の直前、脑梗塞となりキャンセル、ご迷惑をおかけした。そして今回、万全の気力・体力を充実させて参加し、無事帰国できた。

3月21日・晴れ 福井支部から山縣、太田の2女子とともに成田空港に向かい、準備会で顔なじみの人たちとともに、ガイドの中山茂樹氏とエールフランス機に乗り込む。

22日・晴れ ド・ゴール空港経由でジュネーブ空港へ。バノアーズ山群の麓シャンパニのホテルに12時着。独特の建築群が遠来の我々に癒しを与えてくれる。



30年越しの夢がかない、ヨーロッパアルプスを滑る

23日・快晴 バノアーズ山群が紺碧の空に映え、シール登行もまた楽しい。シャンピエルのコルからラモッテの小屋まで快適に滑る。15時着。

24日・快晴 プラニオンまでスキー滑走。リフト、ロープトローを乗り継ぎ、その終点からスキー登行、バノアーズの小屋に12時半着。25日・快晴 グランカッセのコルまでスキー登行、コルからの展望はすばらしい。モンブランやドリユーその他の針峰群に、若いときを読み耽ったガストン・レビュファの『星と嵐』の思い出がよぎる。

26日・晴れ スキー三昧、ペエセイで泊まる。

27日・晴れ スティフォイ泊。
28日・晴れ スキー滑走。ラ・バンド泊。

29日・晴れ 車でモンブラン・トンネルを抜けてシャモニーに入り、フレジエールスキー場経由でラ・トゥールのロツジ泊。自炊。

30日・晴れ 今日からサマータイム。スイスとの国境バルムのコルへ。トリエントまで滑り、バスでアローラに入る。

31日・曇り 3000mまで登り、シール、クトー、ハーネスを着けて氷河を登り断崖にあるピネット小屋泊。トイレは下が見えない。

4月1日・快晴 5時起床、サマータイムなので暗く、トイレも凍っていて危ない。簡単な朝食後ヘッドランプを着けて出発する。ガイドの先導で氷河に滑り込む。レベックのコル、ブルとのコル、バルベ・リーヌのコルではマッターホルンに一同感動。14時半シュタペルアルプに着き、マッターホルン北壁を眺めながらのランチタイムは至福のひととき。ツェルマットのホテルに16時に着いた。

2日・雪曇り 休息日

3日・曇り晴れ ゴルナ氷河を

滑り、モンテローザからの氷河に滑り込む。フウヴィでランチ、ロープウェーを乗り継いでホテルに帰る。

4日・曇り晴れ シャモニーに移動。

5日・晴れ 三浦敬三さんが白寿で滑ったバレー・ブランシュを滑る。シャトルバスでロープウェー駅まで行き、2本乗り継いでエギュー・デュ・ミデイに着く。トンネルの出口でガイドの中山さんたちを待ち、アンザイレンして平坦なところでスキーをつけ氷河を滑る。広いところで休憩。シャモニー針峰群や遠くマッターホルンまで見えた。グラントジョラスやドリユーなど登山車でモンタンピユーからシャモニーまで帰る。

6日・晴れ ピランパズでロープウェーを乗り継ぎブレベントへ。ここからのモンブランの展望はすばらしい。スキー場を滑る。

7日・快晴 長いスキーの旅も終わり今日で皆さんとお別れ。7時50分にロビーに集まり荷物を車に乗せ、成田組の人たちの見送りを受けジュネーブ空港へ向かう。エールフランス便でド・ゴール空港に行き、関西便に乗り換える。

Climbing & Medicine · 24

アンチ・ドーピング的生活の勧め

角田 元

先日、とある競技のドーピングコントロールルームに詰めていました。仕事の一つに直前3日間の摂取薬物等の調査があります。主たる対象は高校生でしたが、約半数があるサプリメントを毎日摂取しており、残りの約半数はあるドリンク剤を競技直前に飲んでいました。効果はわからないけど、ドーピング検査では問題ないので毎日摂取していたり、大会のたびに競技直前に飲んでいらしいのです。今後も一生続けるのか心配になりました。

ドーピングは、競走馬を興奮させる特殊な餌を与えるdopeという英語が語源です。スポーツ競技では、ある病気を治すための薬剤を、競技力を高めるために用いることを指します。これを調べるために尿検査が行われ、今度は薬剤の使用を隠蔽するための薬物や方法が考案されました。これらもドーピングです。

最近では、酸素運搬能力を向上させるための血液ドーピング、エリスロポエチンの投与、更にはエリスロポエチンや成長ホルモンを産生させる遺伝子のドーピングもあります。これに対して2000年のシドニーオリンピック

からは血液検査も施行されています。科学の進歩とともにドーピングの方法や隠蔽方法が進歩し、それに対して検査の方法も進歩する、というたちごっこが続いています。

意外なことに、明らかに競技力が向上すると世界中で認められた物質はないのですが、副作用は必ずあると考えられています。競技力が向上するかもと薬に頼ったり、青少年がまねをしたり、長年経過した後副副作用が出現したり、というのがドーピングの問題点です。

上記のような意図的な場合とは別に、風邪などをひいて、うっかり禁止物質を摂取してしまうような場合もあります。しかし、この場合でも違反は違反です。なんとなく総合感冒薬には興奮剤が入っている、という親切な状況もよろしくないのかもしれない。

結局、サプリメントやビタミン剤には精神的な依存が生じやすいので、なるべく手を出さないようにして、体に良いというよくわからない薬を試してみたりせずに、普段の食事で十分に栄養をとって、適度なトレーニングで鍛えておいて、風邪を寄せつけない身体にしておく、というのがアンチ・ドーピング的生活になります。いわゆる普通の生活ですね。

蛇足ですが、選手がドーピング検査で陽性と判断された時、うっかり禁止物質を処方した医師も「アンチ・ドーピング規則違反」と判断される場合がありますので、ご注意ください。

● さんけん通信 ●

ナチュラルクリーニング

管理人 木村太郎・弥生

遅ればせながら山研もナチュラルクリーニング（ローインパクトクリーニング）を取り入れ始めました。トイレ掃除に重曹、汚れの少ない洗濯物に炭と塩、布巾の漂白にお酢、排水口の汚れ落としに熱湯。塩素が入っていないおいしい山研の天然水をな

るべく最少限の汚れに抑えて排水したい、そんな想いがきっかけでした。

とは言っても何十人もの団体さんが利用した後など、どうしても以前からストックされている合成洗剤に頼らざるを得ない場合もあります。でも殺虫剤としての効力もある洗剤（虫たちには大変申しわけないのですが、以前は大嫌いな虫をお風呂場で発見するとお風呂用洗剤をかけておさらばさせていました）を使つての掃除は見た目にはきれいになつても、何か大切なものを破壊したような悲しい、申し

わけないような気持ちになります。

この感覚は「地球に住まわせていただいている」と思わせる上高地という環境のなせる業かもしれません。まだまだ「環境にやさしい掃除術初心」ではありますが、自然の声、上高地の声を聞きつつ皆さんが来た時に気持ちがいいと思っただけの空間作りに励んでいきたいと思っています。

9月には恒例のプチオータムコンサートも予定されています。

これを機に、おいしい天然水を飲み山研にいらっしやいせんか。

英文誌『ジャパニーズ・アルパイン・ニューズ』の発行

編集人 中村 保

「日本から国外に発信される登山情報は極めて少ない、日本のアルピニズムは世界から孤立して発展している……」2000年2月に日本山岳会の招待で来日したアメリカン・アルパイン・ジャーナル前編集長、クリスチャン・ベックウイズはアメリカ山岳会の会報に書いている。彼のみならず、海外の知日派の登山家から日本発の情報提供が求められていることはつとに指摘されてきた。

そのニーズに応えるために、一昨年の10月に日本山岳会は『Japanese Alpine News』(JAN)第1号を発行。昨年4月に第2号とムスタン特集号を、今年の5月に第3号と第4号「ヒマラヤの東」特集を出し、都合5冊が海外へ発信された。現在海外の125の山岳団体(図書館を含む)と450人の個人に送付している。

■パンコンの向うに世界の登山界が見える

◇「トム、四川省から戻ったばか

りです。JAN最新号は昨日届きました。相棒のラムステンと早速見ています。我々にとつてJANはインスピレーションの源泉です」(英国、ミック・ファルラー)

◇「JANありがとう。美しい写真と地図、立派なでき映えです。長く保存します」(オーストリア、クルト・ティーンベルガー)

◇「JAN3、4号拝受しました。貴殿の25回にわたる辺境への旅の集大成「ヒマラヤの東」の目を見張る写真とたくさんの地図は貴重な資料です。図書館に大事に収められます」(英国王立地理学会・副理事、ナイジェル・ウインザー)

◇「今日目にするには稀なほどすばらしく充実した内容と表現です。情報提供の面で世界の登山界に価値ある貢献をするでしょう」(オーストラリアの南極専門家、ダミアン・ギルデア)

◇「貴会が海外向けの英文ジャーナルを発行していることを聞きました。初刊号からまとめてお送りください。我々の図書館に収めま

す」(チューリッヒ中央図書館図書司、モニカ・ミュラー)

1日に1、2通のEメールが入ってくる。引用はほんの一例であるが、励みになるメッセージが多い。一通一通丹念に返事をする。レスポンスのあった人には丁寧に対応しJANの親派を広げて行くことが大事だと認識している。

■欧米の情報ネットワークへの仲間入り

世界山岳連盟UIAAの遠征委員会は、5年前より世界の山々における初登頂と新ルートの初登攀の記録を集約し冊子のかたちで発表してきた。その主な情報源としてJANは2002年以降下記の8か国のジャーナルに伍して認知されており、ロシアを除いて各団体から直接・間接にJAC本部あるいは私にコンタクトがある。

『American Alpine Journal』(米)、『Alpine Journal』(英)、『High Mountain Sports magazine』(英)、『Rivista del Club Alpino Italiano』(伊)、『Deutscher Alpenverein』(独)、『Federation Française de La Montagne et de l'Escalade』(仏)、『Himalayan Journal』(印)、『Polski Zwiazek Al-

pinizmu』(波)、『Website www.Risk.ru』(露)、『Servei General d'Informacio de Muntanya』(西)

■「ヒマラヤの東」は車の両輪の1つ

JANと「ヒマラヤの東」は私にとつて車の両輪である。日本から発信する情報のなかで、一義的に受け手の興味を惹くのは彼らが知らない領域、出かけるのが難しい土地や山域であろうという視点に軸足をおいて考えると、「ヒマラヤの東」が候補として最適である。ヒマラヤの東端、ナムチャバルワ(7782m)を抱くようにチベット高原からインドへ流れるヤルン・ツアンポー大峡谷の北から東に延びる広大な山系がある。10年以上通つて、ほぼ山系全体を俯瞰できるようになった。その情報は必ずや欧米のパイオニア・ワークを志向する登山家の注目を浴びるだろうと確信した。狙いは間違っていないかった。インターネットに入ってくる問合せの多くは「ヒマラヤの東」についてである。登山に限らずメコン川源流探検や下降も話題性が大きい。「ヒマラヤの東」の紀行は1997年から

継続的にヒマラヤン・ジャーナルに投稿してきた。編集長のカパディア氏はJAN発行ともども高く評価してくれて、私はヒマラヤン・クラブの名譽会員に推挙された。6月2日、カパディア氏はエリザベス女王戴冠50周年記念日に英国王立地理学会のふたつのゴールデン・メダルのひとつパトロンズ・メダルを受賞した。アジア人としてはインド測量局のパンディト、ナイン・シン以来125年ぶりのことである。

「ヒマラヤの東」の原稿を参考までにAAJ編集長、ジョン・ハーリンIIIに送信したところ、たいへん興味を示し、AAJ2003年号に巻頭32ページの大特集を組むことになった。故・吉沢一郎さんと私が親しくしてきたアメリカ登山界の大御所で知日派のニコラス・クリンチの暗黙の後押しがあったのかもしれないがAAJとしては異例の扱いであろう。若い頃海外の情報に関してはAAJがバイブルであった私にとっては感無量である。一方、フランスの新しい山岳誌『Altitudes』が第3号で「ヒマラヤの東」を特集することになっている。『Altitudes』はフランスの登山文化の香りを感じ

させる素晴らしい山岳誌である。

■アルパイン・ニュース発行の三つの課題

JAN作りは3つのことがキーになっている。

1. 記録・情報の収集

JANは日本を代表するジャーナルにしなければならぬ。記録はJAC会員の成果だけに限定せず、オール・ジャパンを視野にニュースの収集に着手する。が、まず驚いたことは100年の歴史と伝統をもつ名門、JACには記録の系統的集積はなく、また情報収集の機能もないことである。落ちこぼれないよう可能な限り日本全国から集めねばならない。暗中模索が続いた。その結果、ヒマラヤ登山に関しては不完全ではあっても日本人の記録が全国レベルで集約されているのは日本ヒマラヤ協会(HAJ)だけであることが分かった。HAJ理事長の山森欣一氏の協力がなければスタートの段階で躓いていたろう。号を重ねるにしたい情報源は少しづつ広がっていった。JACの自前の情報に加え、ネパールは大西保氏と大阪山の会、ヒンズークシュ・カラコラム会議、勤労者山岳連盟が

基礎的なニュース・ソースとなっている。個人ベースでの情報提供にもできるだけ目配りをしている。『山と渓谷』、『岳人』の情報も活用していることは言うまでもない。

欧米に関しては非常に限定的であった。そこで、できる範囲でだが、手探りで送付先を広げて行かねばならなかった。幸い私はアメリカン・アルパイン・クラブ、アルパイン・クラブ(英)、ヒマラヤン・クラブ(印)の会員なので、

記録が集まれば後は本作りである。原稿は英語か日本語のいずれかだが、英語原稿そのまま手を入れずに使えることはほとんどない。日本語の場合は私が翻訳する。一部を倉知敬氏とBBCジャパンの笹生博夫氏にも手伝ってもらった。

米・英・インドについては情報提供を受けることができた。

英語のレビューは必須である。大事なことについてはニュージーランドとアメリカの友人の女性にインターネットで送信し、読みやすくする程度にブラッシュアップしてもらおう。一部は日本人の英語のプロにも見てもらっている。私自身65歳で仕事から離れてまた英語の勉強をしている。

スイスに本部を置くUIAAのメンバー・リスト(世界80の山岳団体)とUIAA役員のリストを入手した。英語圏のカナダはカナダ在住のJAC会員から、オセアニアはニュージーランド山岳会会長からリストをもらった。残るはヨーロッパ大陸である。スペインSGIMにお願いしてフランス、イタリヤ、オーストリア等の国への送付リストを作ってもらったが、有名登山家はカパーしてはいるものの、まだ不完全で手薄な地域であり、さらなる整備がこれからの課題である。送付相手の住所変更を不断にフォローしてゆくのは容易な仕事ではない。

3. 送付先の選定

ありがたいことに柏澄子さんが

一番苦労しているのがJANを誰に送るかである。英文サマリーが載っているJAC『山岳』は海外のわずか32の山岳会に各一部送られているだけである。立ち上げの時海外にコンタクトのありそうなJAC関係者に送付先情報をお願いしてリストをいただいたが、

協力者として最近名乗りを上げてくれた。今後サポーターの輪が広がって、早く後継者が現れてくれることを切に願うものである。

図書紹介



イラスト 蜂谷益雄

高澤光雄・編

『北の山の夜明け』

北海道の山に関する研究資料集。昨年5月の刊行だが、最近本会図書室に納められたので紹介する。

①ジョン・ミルンの千島列島および北海道旅行(水野勉)、②阿倍比羅夫の後方羊蹄山遠征について(高澤光雄)、③黎明期の北海道山岳文学(田中恒寿)、④北の山の詩人・井田清(清水敏一)、⑤北大スキー部と冬季登山(中浦皓至)、⑥鳥瞰図・展望図・対景で見える「北海道名山図絵」(藤本一美)という本文に、⑦蝦夷地名辞書稿・松浦武四郎文献を中心に――(高澤光雄監修・渡辺隆編

著)、⑧神保小虎の明治期における北海道の地質調査とアイヌ語山名(松田義章)、⑨明治前蝦夷地探検開拓史年表(高澤光雄編)という魅力的な内容。

①は明治初期、日本の地質学・地震学を指導したイギリス人の千島と北海道調査を跡付け、解説。②は『日本書紀』に登場する人物と後方羊蹄山とのかわり、さらに松浦武四郎の事跡の謎を追う。③は大町桂月、大島亮吉、伊藤秀五郎の3人から北海道の山の文章をたどる。④は北大山岳部出身、戦前アルプスにも登っているが、不明部分の多い人物の追跡。⑤は北海道の冬期登山初期の紹介。⑥は松浦武四郎、谷文晁から現在まで北海道の山を図絵の面から整理。⑦⑧は詳細な資料集。

どれも読みごたえがあるが、②では阿倍比羅夫は蝦夷地にはきてないとか、松浦武四郎の後方羊蹄山登山はフィクション、山名語源説への疑問などが紹介されている。後半の資料集とともに北海道の山に関心のある人は目を通していただいて損はない論考ばかり。申込みは後記へ。

2002年5月 日本山書の会 (大森久雄)

連続講演会「語り継ぐ 黎明期の登山…それぞれの山」

第1回 堀田弥一氏「山に生きて94年・立山からヒマラヤへ」

資料・映像委員会

日本の近代登山の黎明期、私たちの先達はどのように山に挑み、己を鼓舞し、未踏のルートを開き、岩肌と熱く語り合ったのでしょうか。資料・映像委員会では、日本山岳会の100周年に向けて、黎明期の登山史を知る先覚者をお迎えし、当時をリアルに語っていただきたく連続講演会を企画いたしました。

第1回は、堀田弥一名誉会員(立教大学OB)のご登壇です。堀田氏は1936年に、立教大学が日本人としては初めてヒマラヤ遠征を行い、「ナンダコート」(6867m)に登頂を果たしたとき、隊長を務められました。その時のお話や、立山・黒部のグラウンドから海外遠征に至った経緯など、感動の歴史のひとつまひとつを我々後輩にメッセージしていただけることと思います。

先達の肉声に触れ、時を越えてともに想いを馳せることにより、黎明期の登山史が見えてくるのではないのでしょうか。

なお、当日は登頂の貴重な映像も放映予定です。どうぞご期待ください。

日時 10月16日(木) 18時30分～20時30分

場所 東京体育館 第一研修室(JR千駄ヶ谷駅前)

定員 120名(当日の受付も可能、無料です)

申込み・問合せ 郵便、メール、FAXにて、会員番号、氏名を記入のうえ
奈良 千佐子宛(〒150-0001 渋谷区神宮前3-29-11
FAX 03-3402-6014 メール mt.chisako@mbc.nifty.com)

発行 約324頁 別丁図版5
点 発売・〒001-0001
札幌市北区北十条西4丁目 TEL
& FAX 011-746-2940
サッポロ堂書店 3000円

『熊野 三日月』

坂口貞男・著

和歌山県南部の山村大塔村で昭和4年に生まれ、山仕事に就いたのが11歳のとき。以来60年近く山

暮らしをし、山を下りたのが4年前。現在73歳になる「山びと」の熊野の山を知り尽くした古老が語る、山暮らしの知恵の数々。

厳しい山の生活で刻々と変化する自然の中で接した植物や動物の話、木の話、天候の話、山の神の話など素朴な紀州弁で語られる、今では失われてしまった日本の原風景とでもいうものが見いだせる1冊である。

内容は書名どおり、熊野の山暮らしを1月から12月までに区分し、月ごとに5つの話がとりあげられている。

1月「しもやけにはスギヤネ」、3月「ムササビの布団干し」、5月「ミミズの熱さまし」、9月「イタチが横切ったら仕事は中止」など、いずれも興味深い話の数々である。

序文で著者が「四季折々の山暮らしについて、大変やったこと、愉快やったこと、驚いたこと、なるほどと思ったこと、昔の人の生きる知恵や工夫みたいなものも、よおけ入つとるはずや。『昔の人はこんな苦労したんやなあ。そやから今、みな、こうしておられんやなあ』そんなふうにならなくても何

か感じて読んでもらたらと思うな」と語っている。(大橋 晋)

2002年11月 角川春樹事務所発行 222頁 定価1990円

立教大学山岳部・編

『部報第11号』
(1983~2000年)

最近の18年間の活動をまとめた部報である。さる5月24日、セントポール構内で行われた「創部80周年記念祝賀会」で出席者に披露された。

第1章は「海外登山報告」。1987年秋の学生中心のナンダクト再登頂、1993年のチベクト・チョモロンゴ登頂、98年4月から8月にかけてのガツシャブルムII峰登山、当時としては珍しかった学生だけのネパール合宿などが収載されている。第2章は剣や槍・穂高などで行われた15の国内登山の報告。

もつとも「報告」として採り上げられているのは92年の冬山まで。以後はスケールのにも1週間を超えるような山行がほとんど行われていないためか、現役部員たちの記録は第3章のクロニクル(年

録)で参加者、日時、コースが略記されるにとどまっている。年録からは93年以降、立教もご多分に漏れず、部員数が極めて少ないことが読みとれる。

第4章「足跡」は3つの座談会でOB、部員たちの歩みの節目を辿っている。「立教の山」と呼ばれるナンダクトへの1987年の再登頂が、堀田弥一さんから50年前の初登頂者らを交えて語られ、採録されている。ヒマラヤとの関わりを歴代のOBが語るシンポジウムがあり、さらに「歴代主将が語る山岳部の歩み」で、18年の活

動の背景にある時代の流れや山登りに対する考え方、部の雰囲気、ざつとばらんに披露されている。話があちこちに跳んだり内輪話に過ぎるところもないではないが、先輩後輩の自由かつ率直なつながりもよく見えて、逆にそれが面白い。もちろん、真面目な将来展望で締めくくられている。

2002年6月 立教大学山岳部発行 400頁 A5版 3000円(送料共) 購入希望者は加計まで(FAX 044-852-13851)

(成川 隆顕)

「山の本」新刊発売中!!

関西の沢登り(1) 台高の沢

樋上嘉秀 著 四六判 230頁 本体1,900円

台高山系の谷は水量も豊富、数十米の大滝をいくつも架けて豪快。32谷を厳選して詳細地図付きで紹介。

鈴鹿の山を歩く

草川啓三 著 四六判 330頁 本体2,500円

全山約85のプロフィールとガイド。珠玉の尾根歩きコース20を紹介。カラーフォトエッセイなど、盛沢山な内容。

●好評発売中

全世界紀行一民族と歴史、そして冒険

南里章二 著(9364) A5判 480頁 本体2,700円

シルクロード、ヒマラヤの踏査。コンゴ、アマゾン川下り。サハラ砂漠縦横断など、世界全独立国192カ国を旅して。

カラコルム・ヒンズークシュ登山地図

〔付〕カラコルム・ヒンズークシュ山岳研究

A4変型判 上製美装ケース入 385ページ B全判地図13葉

宮森常雄(秩父宮記念山岳賞受賞)・雁部貞夫 共著

◎好評発売中!! 定価(本体33,000円+税)

ナカニシヤ出版

〒606-8316 京都市左京区吉田二本松町2
Tel.075-751-1211 Fax.075-751-2665
URL http://www.nakanishiya.co.jp/

図書受入報告 (2003年6月)

著者	書名	ページ・大きさ	出版元	出版年	寄贈/購入別
高澤光雄(編)	日高山脈の先蹤者:相川修先生遺稿集	99pp/21cm	JAC北海道支部	2003	相川岳夫氏寄贈
岳人編集部(編)	新・山の雑学ノート(すぐ役立つシリーズ)	213pp/19cm	東京新聞出版局	2003	出版社寄贈
廣川健太郎	チャレンジ! アルパインクライミング:北アルプス編	207pp/26cm	東京新聞出版局	2003	出版社寄贈
渡辺千昭	シャングリラ:東チベットの仙境へ[渡辺千昭写真集]	83pp/25cm	東京新聞出版局	2003	出版社寄贈
羽根田治	ドキュメント 気象遭難	253pp/19cm	山と溪谷社	2003	出版社寄贈
杉原五雄	どんぐり校長の自然塾:子どもたちに緑の体験を	254pp/19cm	山と溪谷社	2003	出版社寄贈
H.ノーバーク・ホッジ	ラダック 懐かしい未来	262pp/21cm	山と溪谷社	2003	出版社寄贈
重廣恒夫	エベレストから百名山へ(光文社新書 No.100)	318pp/18cm	光文社	2003	著者寄贈
順天堂大学医学部山岳部(編)	順天堂大学医学部山岳部50年の歩み(1952-2001)	255pp/26cm	順天堂大学山岳部	2003	発行者寄贈
順天堂大学医学部山岳部(編)	第2回ヒマラヤ遠征メラビーク峰報告書(2000年)	51pp/26cm	順天堂大学山岳部	2000	発行者寄贈
立教大学山岳部(編)	部報 第11号:立教大学山岳部創立80周年記念号	399pp/22cm	立教大学山岳部	2002	発行者寄贈
M.F.Buchroithner(ed.)	High Mountain Cartography 2000	269pp/30cm	Dresden Univ.	2000	W.Heichel氏寄贈
W.A.Poucher	The Scottish Peaks (7th ed.)	511pp/18cm	Constable	1991	勾坂馨氏寄贈
Pan Books (ed.)	Walker's Britain: The Complete Pocket Guide	336pp/20cm	Pan Books	1982	勾坂馨氏寄贈
W.A.Poucher	The Lakeland Peaks (9th ed.)	441pp/18cm	Constable	1986	勾坂馨氏寄贈
Richard Gilbert	200 Challenging Walks - In Britain and Ireland	224pp/16cm	Diadem Books	1990	勾坂馨氏寄贈

◆メール投稿に関するお願い◆

- 投稿の際には、jac-info@jac.or.jpではなく、jac-kaiho@jac.or.jp宛にお送りください。
- 写真付きの原稿も歓迎します。デジカメでは、画質の設定を印刷用にしてご撮影ください。ホームページ用に設定された写真などでは、画像の粒子が粗く使えない場合があります。
- ご不明な点は jac-kaiho@jac.or.jp までお問い合わせください。

会務報告

6月理事会

日時 6月11日(水)18時30分～20時30分

場所 日本山岳会会議室

出席者 平山会長、芳賀、平林、橋本各副会長、藤本、今村、朴元、贄田、田村、鈴木、黒川、野口、石田、篠崎、鳥居各理事、内田、石力各監事、宮崎、鱈坂、小倉(董)重廣、西村各常任評議員

〔委任〕 小川、大蔵各理事

◎会議に先立ち、平成14年度海外登山基金助成金対象の明大アンナプルナー峰登山隊、東京農大エウレスト・ローツェ登山隊よりお礼の挨拶があった。

また平山会長より100周年記念企画プロジェクトの審議は時間をとりたいので最後にしたい旨発言があった。

〔審議事項〕

1 北海道支部主催の自然学校に対する助成の件 藤本

「こうした助成を実施するための基準を設けるべし」「何度かの実績をつんだ所に助成しては」「1人当

りいくらと決めては」などの意見が出された。今後の山岳会の若年者の増大にも寄与するということが助成を実施することが了承された。

2 「高尾の森づくりの会」の緑の募金公募事業応募申請の件 篠崎

通常3年間で助成は打切られるが、山岳会の下部団体として名称を変更して再度申請したいとの提案があり、現在の活発な活動内容を評価し、100周年記念事業にもつながると了承された。

〔報告事項〕

1 会報『山』6月号の内容について 今村

9月号は700号記念としてカラー印刷でやりたいので、財務と相談して実施する。

2 予算管理月報 橋本

別紙報告あり。100周年の寄付は現在のところ466万円である。別紙のとおり平成15年度予算執行についての依頼があった。

3 本年度ウェストン祭について 小川(藤本代)

4 青森支部新役員決定について 藤本

支部長・根深誠
事務局担当者・中村勉

5 山岳資料掲載依頼 藤本
ウェストンの肖像 日本アートセンターより

6 英国エヴェレスト財団2003年助成金対象の海外遠征計画一覽(別添資料) 田村

7 各委員会報告 鳥居

学生部 以下の予定あり。

● 6月21日クライミングコンペ(千葉大)

● 7月5～6日沢集会(西沢渓谷)

● 7月18日前期納会(ルーム)

科学委員会 石田
以下を実施した。

● 5月15日「南の塩の道」講演会

● 6月7～8日探索山行「南の塩の道」

自然保護委員会 篠崎

● 「山の自然学研究会」の件、自然保護委員会で事情を聞いた。今後とも、委員会と連携してまぢがないよう指導していきたい。

● 自然保護全国集会を10月12～13日に岐阜支部と共催する。多くの皆さんに是非参加していただきたい。

事業委員会 朴元

6月5～8日 出羽三山登山を実施。

〔審議事項〕
3 創立100周年記念企画プロジェクトの件 平山会長

100周年記念事業推進組織(案)の各委員会は、できれば7月の理事会で検討し、少なくとも9月には決めたい。

自由に発言して下さい。

● はじめに平林プロジェクトリーダーより企画プロジェクト内容(別紙)の説明があった。

● 募金委員会には歴代会長、80周年、90周年の人も入ってもらったかどうか。

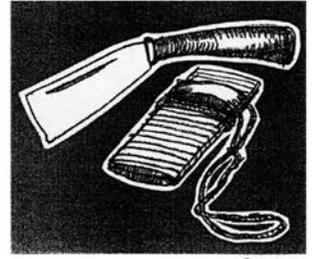
● 募金の目安として

会員募金	4000万円
一般募金	2000万円
長期積立取崩	2000万円
事業収入	500万円
計	8500万円

● 記念施設、設備等については実質、実行できないのではないかと。● 全会員参加とすれば企画段階から参加してもらってはどうか。

● その他多くの意見が出されたが、次回常務理事会を1週間早めて、7月1日(火)とし、それまでに総務理事宛に100周年記念事業に対する提案、具体的実施案を提出することになった。

INFORMATION



イラスト・宇都木慎一

◆第9回白山地ブナ林再生事業

青森支部

テントで野営しながら国有林不成績スギ造林地を天然林に戻すための作業。単なる植樹ではありません。ブナ林のキノコ料理、ヤマブドウ狩り、野鳥や野生動物との出会いなど、白神の自然を楽しみながら作業します。

日程 9月19(金)〜21日(日)

作業内容 スギの除伐、下刈り、

蔓切りなど

定員 60名(達し次第締め切り)

申込み 村田孝嗣宛 〒0361-

8323 弘前市浜の町東

5-3-19 FAX 0172-3-

3-4-6807 danburi@in-

foamori.ne.jp

◆紅葉山行のお知らせ

事業委員会

恒例の紅葉山行を四国の剣山・

石鏡山にて開催します。

日程 10月10(金)〜13日(月)

往復航空機利用(羽田発・

着) 祖谷温泉・面河溪・道

後温泉に宿泊、行程中移動

は貸切バス。

費用 11万8000円

定員 20名

申込み 9月20日までにはがきか

メールで会員番号・氏名・

住所・電話番号を明記し山

崎浩子宛(〒236100

33 横浜市金沢区東朝比

奈1-65-3 y.tiro@f3.

so-net.ne.jp

*申込者には詳細を送付します。

◆第11回写真展「心に映る山々」

アルパインフォトクラブ

山岳、自然風景、山の花など約

60点を展示。

日時 9月4(木)〜9日(火) 10〜19

時 最終日は17時まで

会場 新宿野村ビル・ギャラリー

(TEL 03-333461326

1) 代表・羽田栄治(TEL 03-

1-333661-3675)

*入場無料

*本展終了後、支部での巡回展示

の希望があれば相談します。

◆第1回山岳文化学会大会

山岳文化学会

今年3月に設立された本学会で

は、第1回の大会開催にあたり、

研究発表の演題を一般から募集し

ます。

日程 11月29〜30日(予定)

場所 東京周辺を予定

演題内容 山の人文、山の自然、

登山行動と登山者、山岳地

域研究など山岳に関するこ

とから全般。

演題締切り 9月30日

口演時間 口演20分、討論5分

参加費 3000円

問合せ 〒170-0013 豊

島区東池袋4-2-7 萬栄

ビル501 日本ヒマラヤ

協会内 山岳文化学会大会

係 TEL 03-3988184

74 FAX 03-398818

502

◆氷河公園の实地研修山行

山の自然学研究会

昨年に続き、氷河作用の顕著に

現れた錦秋の檜沢・天狗原を再訪。

高山植物の保護などには氷河地形

を知る必要がある。

期日 9月28(日)〜30日(火)

集合 28日7時30分山研、8時出

発(前夜泊も可)

行程 山研―檜沢ロッジ(泊)―

天狗原―横尾山荘(泊)―

横尾岩小屋跡―横尾―上高

地(解散)

費用 実費2万円(資料配付・宿

泊代)

程度 健脚向・初冬登山装備

定員 12名

同行 L船橋明、S.L櫛田勁

申込み 9月10日までに船橋明宛

(FAX 0467-321301

1)

*山岳保険等に未加入の人は「上

高地山岳保険」に加入のこと。

◆山研合宿 山遊会

霞沢岳に登った後、山研で1泊、

恒例の懇親会を開催。山遊会会員

および入会希望者のご参加をおま

ちして(10名限定)。

日時 9月13(土)〜15日(月)

集合 13日12時30分 上高地山研

前(霞沢岳登山希望者)。

懇親会のみ出席の方は、各

自自由に14日、山研に集合。

申込み 氏名、住所、電話、会員

番号を表記の上、ハガキ、

メールで8月25日までに。

(〒190-0003 立川

市栄町5-50-18 TEL: FAX 0

42153713457
 Kyama@kit-hi-ho.ne.jp
 担当 山本憲一
◆恵那山と南木曾岳山行

紅葉の恵那山と木曾の名峰南木曾岳をめぐる山行。JACC会員の方の参加大歓迎です。

日程 10月17日(金)22時 新宿駅西口東京三菱銀行前集合

18日(土) 神坂峠―恵那山―昼神温泉(懇親会・泊)

19日(日) 南木曾岳登山―新宿

参加費 1万8千〜2万円(バス代、1泊2食)

移動 貸切バス

募集 16名(先着順)

申込み 9月15日までに往復ハガキかメールに会員番号、氏名、連絡先、恵那山行を明記し徳永泰朗宛(〒180

10006 武蔵野市中町2-28-12toku3@parkcity.ne.jp)

*地方支部会員の自家用車による現地参加もお受けします。

*詳細は参加者に別途ご案内。

◆紅葉の西丹沢ハイク

97同期会

晩秋の西丹沢を訪れ、ブナやミズナラの紅葉をめぐる静かな山旅。同期以外の方の参加も大歓迎です。

日程 11月8(土)〜9日(日) 新松田駅(バス・車)―西丹沢―善六のタワ―畦が丸―大滝峠上―大滝橋―丹沢湖(9日は自由山行)

宿泊 民宿 落合館 TEL046517813190

費用 約1万円(宿泊、懇親会、バス代等)

申込み ハガキに①ハイク、②懇親会③宿泊の参加希望を明記のうえ10月20日までにJACC事務局97同期会メールボックス宛

問合せ 皆川恵男(Tel042137313003)

会員異動

物故 草替広正(12017) 03・5・30
 松本英一(7865) 03・6・26

退会 元井 芳正(6090)
 木村 友弥(6175) 越後
 川村 治朗(6221)
 増田富三男(10729) 関西
 小林 晃(10828)

ルーム日誌

6月

2日 百年史委員会 総務委員会
 3日 アルパインスケッチクラブ
 4日 アルパインスキークラブ
 5日 フォトビデオクラブ
 6日 01同期会
 9日 学生部委員会 指導委員会
 総務委員会 アルパインスキークラブ
 10日 常務理事会 二火会 アルパインスケッチクラブ
 11日 理事会 つくも会 休山会
 12日 山の自然学研究会
 13日 フィルムビデオ委員会
 16日 資料委員会
 17日 百年史委員会 自然保護委員会
 インターネット小委員会 00同期会

杉井 昭雄(10961)
 柴 昌実(11429)
 山城 貞雄(12278)
 柚木 泰幸(12859)
 山内 和子(13257) 福井
 野田耕一郎(5678)

18日 三水会 山研運営委員会
 19日 科学委員会 会報編集委員会
 青年部 山遊会
 20日 緑爽会
 24日 自然保護委員会 九五会
 25日 図書委員会 アルパインスキークラブ
 26日 事業委員会 97同期会
 27日 資料・映像委員会 事業委員会 高尾の森づくりの会 6月来室者634人

■訂正
 7月(698)号15ページ3段16行、村山祐嗣は裕嗣の誤りでした。お詫びして訂正いたします。

◆編集後記◆
 ●会務報告にあるように、来月号は700号記念として1度だけオリジナルカラー印刷となります。楽しみにしててください。(今村)

日本山岳会会報 山 699号

2003年(平成15年)8月20日発行
 発行所 社団法人日本山岳会
 〒102-0081
 東京都千代田区四番町5-4
 サンビュウハイツ四番町
 TEL 東京(03)3261-4433
 FAX 東京(03)3261-4441
 発行者 大塚博美
 編集人 今村千秋
 E-メール jac-kaiho@jac.or.jp
 印刷 株式会社 双陽社